

AMCoR

Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究集録(2020.3) 令和元年度:22.

壮年期にある婦人科がん・乳がんの終末期に関わる看護師の看護観とその背景

丸矢 莉穂, 林 愛里

壮年期にある婦人科がん・乳がんの終末期に関わる看護師の看護観とその背景

旭川医科大学病院 5階東ナースステーション ○丸矢莉穂 林愛里

【目的】

壮年期にある婦人科がん・乳がんの終末期患者に関わっている看護師に、自身の体験や思いを語ってもらうことによって、看護観が形成される背景を明らかにする。

【方法】

A病棟で婦人科がん、乳がんの終末期患者に関わっている経験年数5年目以上の看護師5名を対象に、患者と関わる上で大切にしていることとそのきっかけとなった体験について、半構成的面接法を実施し、プライバシーが保護される場所で1人1回30分程度とした。面接内容は対象者の許可を得て録音した。逐語録を作成し、質的帰納的に分析した。調査期間は2018年8月から11月である。本研究は、研究者の所属する倫理委員会の承認を得て実施した。

【結果】

面接データから、75個のコードと18個のサブカテゴリーが抽出された。それらを〈家族・同僚の言葉から看護師としての自分を見つめなおす経験〉〈ひとりの女性として向き合う〉〈自分ができることをする〉〈余命について考える〉〈人生の最期を考える〉〈目指す終末期看護〉の6個のカテゴリー(以下〈〉)とした。

【考察】

〈家族・同僚の言葉から看護師としての自分を見つめなおす経験〉は、患者と看護師の関係性を越えて、年齢に関わらず性の喪失について考える、壮年期の女性役割について考える等の〈ひとりの女性として向き合う〉姿勢や、ありのままの自分で患者に寄り添う等〈自分ができることをする〉行動に繋がっていた。また〈家族・同僚の言葉から看護師としての自分を見つめなおす経験〉は、患者本人が余命を知りたいかが大切であると感じ、単に余命を伝える、伝えないではなく、患者一人一人の思いや背景をくみ取りながら〈余命について考える〉こと、さらに生や死と向き合い患者や家族にとってよりよい最期とは何かという〈人生の最期を考える〉機会になっていると考えられた。これらの過程の中で、終末期患者と関わる上で目指す看護師像を形成しながら看護観を深めるとともに、患者や家族の思いをくみ取った自分の〈目指す終末期看護〉を見出していた。これらの過程から〈目指す終末期看護〉は、看護の目的や目標となるものであり、看護観を示唆するものであると考えられた。